# ショタコンさんとイケメンくん

三笠 諒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ショタコンさんとイケメンくん

【Ｎコード】
Ｎ１７７５ＢＡ

【作者名】
三笠　諒

【あらすじ】
ショタコンである陽は駅前でとあるイケメンに出会う。その人とは意外な関係があり――？

## （前書き）

ショタコン（主人公）の扱いが結構ひどいです。

「おぉ！すごいね、コレ」

わたし――佐倉陽（さくらよう）は、友達の相原（あいはら）みなみの家にあった古い写真を見て感動していた。

その写真はところどころ破れてたり、色が薄くなって見えないところもあったが伝えたいこと、なにをしていたのかはしっかり伝わった。

「この少年、かぁいいね」

「可愛いをわざわざ変な発音にしたのが少し疑問だけど……まぁいいわ。本当に可愛いでしょう。わたしたちくらいの歳だったらぜったいイケメンね！」

「わたしはショタのままでいいかも」

「黙れショタコン」

つぶらな瞳をした柴犬と、それよりも頭ふたつぶんくらい大きい少年がにっこり笑っているのが写っている写真であった。見ていると、胸がぽかぽかと温かくなって、現代社会（高校生だけど）でささくれた心がおちついた。笑顔で犬と戯れる少年が想像でき、微笑ましい気持ちになる。

「……わたしも、犬になってこの子と遊ぶ！」

「黙れ変態。黙れっていってんのが聞こえないのか！」

「聞こえない！わたしのこの走り出した気持ちと体は誰にも止められない！……この子（ショタ）以外は！」

「『誰にも』じゃないでしょう！だいたい今貴女のどこが走り出してるのよ、ソファーでくつろいでいるのを『走り出す』なんて表現使う奴初めてみたわ！」

「よかったね、今日見れたじゃん。
てれてれってれーん！みなみは　経験値が　１　あがった！」
「１なの！？少なっ！！」
正直言おう。わたしは変態（ショタコン）なんかじゃない。
ただ小さい子が好きなだけだ！
「それが変態なのよ！」
「えぇ！？　チミ、わたしの考えていることが分かったのかね！？」
「あんたが考えそうなことぐらい数年も友達やってれば分かるわ！
それと『チミ』ってやめてくれる！？ウザいわ！」
「……てれてれってれーん！みなみは　ツッコミ能力が　１８９　あがった！」
「なにその能力！？しかも上がる数がキリ悪い！１足せば１９０でしょ！？なんでそこで１８９！しかもさっきの経験値に比べて上がる数が異様に多いわ！」
この友人はツッコミ担当だと……「不名誉！やめてくれる！？」
……思う。「無視かよ！スルーかよ！」いやあ。こんなに考えていることがわかるなんて……
もしかして、みなみって、わたしのこと……
好…「キモい！なに考えてるわけ！？」
……違う、のか。「あたりまえでしょ！？」
残念だ。――別に、残念じゃないけど。「どっちなの！？」
……。
……。
……。

「ねぇ！わたしってそんなにわかりやすい！？タイミングばっちりなんだけど！」

「……はぁ、」
足りない。――なにが、って、ショタに決まっているじゃないか。
（そこらへんにショタ、落ちてないかなぁ？……いや、落ちてるなんて可哀想だ。せめて歩いているぐらいにしてあげないと！）
駅前を歩きながらそんな超有意義なことを考えていると。

どん、

人にぶつかってしまった。
「あ、すみませ、……！？」
「……？――いえ、こちらこそすみません」
それも超美形（イケメン）に。
（ただし結構歳はいってるわね）
見た所、17、8といったところか。
「……惜しいな、二分の一だったらいけたのに」
「……は？」
「いえいえなんでもありません。ではわたしはこれで失礼します」
訝（いぶか）しげなその人を適当に誤魔化し立ち去ろうとする。青年をもう一度見ると、
「……あ、れ？」
不思議と既視感に襲われた。いや、さっきじゃないのだ。それよりも前。でも、そう遠くはない過去に――、

「……まだ、なにか？」
それを思い出そうとして無意識に青年を見つめていたらしい。さっきよりも怪しげな視線を送られた。
「えっと、あの……以前、お会いしたことは？」
そういうと、青年は蔑（さげす）むような顔つきになった。――え？何？確かに不審者同然のセリフだったけど、そんな視線で見られることだったっけ？
「ありませんよ。勘違いでしょう。そういうことを言って俺と縁をもとうとするの、やめていただけませんか」
……あ、そういうことね。
この人美形だから、そういうことも多々あったのかもしれない。
（……でも！）
（ショタコンの誇りとして、その勘違いは訂正してあげなくてはならない！）
「違いますよ。貴方と恋仲になるなんて考えたら怖気がします。もしなりたかったら五年くらい若返ったらギリでＯＫですよ」
「――え？」
「あ、あと、勘違いでしたか。不愉快な思いをさせてすみませんでした」
ぺこりと一礼して華麗に去る。

つもりだった。

「ま、待って下さい！」

青年に腕をつかまれた。――え？
「あ、貴女、友達に相原みなみって子、いますか！？」
「……はぁ？いますけど、それがなにか？」
さっきわたしに素晴らしいショタを紹介してくれたツッコミ属性の友人である。忘れるわけがない。

「その子に、『駒沢裕太（こまざわ ゆうた）は駅前の銅像前にいる』って連絡してくれませんか？」
「……みなみと、お知り合いですか？」
「そうなんです！」
「……分りました、」
携帯を取り出して、みなみにメールを送る。するとすぐに返信がきた。
『ありがとう！すぐそっち行くから動かないでって裕太に伝えておいて！』
（……本当に知り合いだった！？）
半信半疑だった分、驚いた。
とりあえず伝言を伝えると、「ありがとうございます！！」と90。の礼をして銅像へと歩いていった。
（みなみ？……って、あ！）
既視感の正体がようやく分かった。
「あの！」
「なんですか？」
駒沢さんが振り返る。
「柴犬は元気ですか！？」
そう。彼はあの写真の少年の成長した姿だった。顔に少し面影が残っている。みなみの知り合いだというし、間違いないだろう。
「！　……、五年前に、死にました。」
「そう、ですか」
「貴女、なんであいつのこと――」
「裕太！！」
みなみの声がした。
「みなみちゃん！」
駒沢さんが途端に笑顔になり、みなみに駆け寄る。みなみも笑顔で話し出した。
「久しぶり、元気だった？……って、陽じゃない。」

なんだか後半から笑顔がなくなった。わたし、可哀想。
「やっほー！みなみ！何々？彼氏？」
そう言ってわたしもみなみによってくと、シッシッと手であしらわれた。ひどい。
「違うわよ、従兄よ、イトコ！」
「……へ？イトコ？」
まぁ、彼氏の小さい頃の写真なんて滅多にもってないよね。
みなみによると。
なんか親があんまり仲が良くなくて、小さい時一回会ったきりらしい。その時にとても仲良くなった二人はしばしば電話で話していたという。それでまた会いたい、という話になったらしく、駅前で待ち合わせにしたのだが、駅前で迷ってしまった駒沢さんが偶然ぶつかった友達に連絡を頼んだ（ちなみに携帯は駒沢さんが家に置いてきてしまったらしい）、ということだった。
それより気になったのが。
「駒沢さん。この子、わたしのことなんて言ってるんですか。」
なんか変態的なこと言ったらみなみの友達だと気づかれたんですが。どうみてもロクなこと言ってないと思う。
「ふざけたショタコンだといつも電話で聞いてます！」
「みなみぃいいいいいい！！」
「ごめんごめん、でも事実じゃん」
「ふざけてないよ！」
「あ、怒ってたのってそっち？」
「え？どこに怒ってたと思ったの？」
「ショタコンってとこ」
「いやいやいや、そこは美点」
「あんたの感性ってどこかおかしい」
みなみと言い合ってると、控えめな笑い声が聞こえた。
「ゆ、裕太？」
駒沢さんが笑っていた。みなみはぽかん、としている。

「ふ、本当に、おもしろいですね……陽さん」
「……？なんで、わたしの名前――？……！またみなみですか！？」
「はい、そうです。いつもみなみちゃんに陽さんのお話、聞かせてもらっています」
「そ、そうなんですかぁ……ちなみにどんな？」
「いつも陽さんが変態なことだとか」
「……えぇ、」
「いつも陽さんがうるさいことだとか」
「……はい、」
「いつも陽さんが馬鹿なところとかですかね！」
「みなみぃぃぃぃぃぃぃ！」
「――てへ☆」
「キャラ違うよ！」

あはははははは、

今度は控えめなんかじゃなくて、大きな声。
「す、すみません。おもしろくって。――あの、陽さん。俺とも友達になってくれませんか？」
「……、……――いいですよ」
「思考時間長いな！」
「ショタじゃないからさ！」
「あんたの判断基準にびっくりした」
「――陽さん、あの、敬語、やめませんか？ほら、友達になったわけですし！」
「はい――じゃなくて、うん。分かったよ。じゃあそのさん付けもやめてよ」
「分かった！じゃあ、陽も駒沢さんじゃなくて裕太って呼んでくれないか？」
「ＯＫ！」

「さんきゅ！」
「あ、なんかそれカッコいい」
「だろ？」
「あんたら仲良くなるの速いな！」
異様なスピードで仲良くなったわたしたちにみなみがつっこむ。
それにわたしはドヤ顔をしながら答える。
「特技です」
「マジで！？」
そんな風にしゃべっていたら、ふと時計を見ると三時半になっていた。駅前を歩いていたのがだいたい一時前くらいだから二時間半しゃべっていたことになる。
「――あぁ、もうこんな時間。ゴメン、みなみ、裕太。少し用事があるからこれで失礼するね」
名残惜しいが立ち去ることにする。お母さんがわたしに用事があるらしいのだ。
「分かったわ。また明日ね」
「じゃあな！」
「ばいばーい、またね！」
『またね』に嬉しそうに裕太は笑った。

みなみはショッピングモールを歩きながら裕太に話し掛けた。
「それにしても珍しいわね」
それに不思議そうに裕太は言った。
「なにが？」
「裕太が自分から女の子と仲良くしようとすること」
そう言うと、裕太は笑った。
「そうだな」

「何？好きになっちゃった？」
ふざけて言うと、裕太は突然立ち止まった。なにかを考えるような仕草をして、すぐに思いついたように顔をあげる。
「……っ」
「……え？どうしたの？」
本気で心配して問うと、裕太はやけに真剣な顔をして、

「――俺、好きかも」

――あの人のこと。

みなみは　１０００　の　ダメージ　を　うけた！！

**（後書き）**

とりあえず書きたいことをぶちこんだので分かりにくいのはご愛嬌。

展開速いのもご愛嬌。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1775ba/

---

ショタコンさんとイケメンくん

2012年1月4日15時52分発行